

■第22回大会関連

■日中社会学会22回大会に向けて

中村則弘(日中社会学会会長・愛媛大学)

最初に何より、大会準備に奔走されている一橋大学関係者の方々、大会担当理事、学会事務局にお礼を申し上げます。今年は、中国社会経済史・地域史研究の泰斗である江夏由樹先生による「奉天地方社会有力者と清朝皇室」についての講演、「グローバリゼーションとチャイニーズネス」、「現代中国の教育と移動」という2つのシンポジウムが用意されていると聞き及んでいる。どれも本学会ならではの、とても興味深い内容である。自由報告については、海外研究者のものもあり、いずれもが出色のように見受けられる。

これらの報告が、中国社会の理解にとどまらず、新たな時代の扉を開かんとする意欲に満ちているように見受けられることは、とてもうれしい。本学会の持ち味が、いよいよ発揮されている。会長任期における最後の大会でもある。事務局からの準備状況の報告をうけ、心からの充足感をもっている。

とはいえ、次年度以降に向けた、いろいろな課題も残されている。たとえば、「中日社会学会」や香港における関係学会との共同開催があげられる。さらには、欧米、とりわけ欧州の研究者たちとの連携による開催も模索してよいように思われる。中国はもちろん、香港や欧州においても、中国・日本を素材とした研究から新たな時代を模索しようとしている方々が、日増しに増えているという印象を持っている。別の言い方をすれば、いまや中国・香港・欧米との連携・協力が必要とされる状況を迎えているのだろう。これまでの本学会の取り組みは、間違いなく、こうした潮流と合致している。さらにいえば、この取り組みこそが、世界に向けて発信し得るわれわれの社会学なのだを確信している。

新たな時代への道筋を考える必要は、われわれの身近でも切実なものになっているのではないだろうか。それを実感させられる、ささやかな出来事があった。

私事にわたり恐縮だが、連休中に父84歳が他界した。心筋梗塞であった。家族の前での、あつと言う間のことだった。「病院に入り、息子の世話にはなるようなことはしない」と意を決していたのだから、大往生といえば、そうだろうと思う。

通夜と告別式のため徹夜で行った法事録と過去帳の「解説」から、改めて慣習がもっていた複雑かつ巧みな意味合いを実感することができた。だが、親戚、町内会、同業者、友人・地域、寺院との関係をみても、その維持は困難であり、それは解体に瀕している。一方で、年金、保険、税金、遺産の処理をめぐる公的制度と社会慣習の間には、どうしようもない断層が作り出されている。こともあろうに公的制度が、いらだたしいまでに課題を深刻化させている。こうした解体と断層は、孤独死、生前契約、特殊清掃を身近なものとしている。散骨もそうである。これも多くの場合、そうせざるを得ないという事情によると聞いている。解体と断層のなかで、ともすれば「千の風になって」彷徨うしかないのである。

何のことはない。祖先崇拜、祖先祭祀そのものが行き詰まっている。これは歴史的にみればわれわれのアイデンティティが危機に直面しているとみることができる。種々の問題はあつたにせよ、とても巧みに作り上げられていた慣習を、近代の名のもとと無碍に解体に導いた結末がこれなのである。父の死をめぐる事後処理から、われわれが学んだことの無力さ、現実生活との大きなずれを実感した。さらには、近代というものが、いかに「死」ひいては「生」という根本課題を隠蔽したのかということをも痛感した。

改めて、22回大会の記念講演、シンポジウム、一般報告の内容は、どこかで日本、中国からの根本課題の解決に向けた挑戦につながっていると思えてならない。その内容は、祖先祭祀がそうであるように、日本と中国を跨ぐものとなっているのである。さらに、父の他界では触れなかったが、それはグローバル

な関係を考へて行かねばならなくなっているのである。今回の大会の多くの報告はまさに、何らかの形でこの的を突くものになっている。われわれは、知らないうちに、世界に向けて発信すべき内容に踏み込みつつあるのかも知れない。このことでも、22 回大会は日中社会学会の新たな「旅立ち」を告げるものになると確信している。

■日中社会学会第 22 回大会をお受けするにあたって

南裕子（第 22 回大会実行委員長・一橋大学）

日中社会学会についての私のイメージは、新しい、若い学会であるというものでした。しかし、今回、大会開催校をお引き受けするにあたって、今年ですでに第 22 回目を数えるという事実を再認識し、諸先輩方が築かれてきた中国研究、日中学術交流の歴史の重みをあらためて感じております。

私が院生時代に初めて入会した学会は日本社会学会とこの日中社会学会でした。1990 年代の初頭のことです。当時、社会的なアプローチによる中国地域研究の先輩や仲間を周囲になかなか見つけられない中で、この学会の存在を知り、喜んで入会しました。そして、会員の方々の専門性の高さ、研究の射程の大きさから多くを学びました。これは、現在に至っても変わることなく、毎年、大会の場で全国各地の会員の方々と交流を深め、そして自らの研究への刺激を得ています。

今回は、ある意味この学会への恩返しとして、開催校をお引き受けいたしました。これまで自分が経験させていただいてきた知的刺激に満ちた場を、この一橋大学でも提供できればとの思いで、微力ながら現在準備を進めております。

会員の皆様もすでにご存じかとは思いますが、一橋大学は古くから中国研究が盛んな大学です。例えば、明治末期より「東洋経済事情」の講義が開講され、中国経済の動向分析を行うなど、中国に高い関心を寄せていました。また、社会経済史の分野の先人、根岸信教授そして村松祐次教授、さらには昨年社会学部を退官された三谷孝教授の社会史の諸研究には、本学会でも多くの会員の方々が触れられたことがあるのではないのでしょうか。

ところが残念なことに、これまで日中社会学会と本学との接点はほとんどなかったようです。そうした中、今回は、経済学研究科の江夏由樹教授に大会の特別講演をしていただけることとなり、大変嬉しく思っております。

江夏教授は、中国東北地域の近代史がご専門です。私は昨年、経済学部の「地域研究の方法」という授業を共同で担当させていただきました。中国における官と民間の関係、中間団体（宗族や同郷団体等）をテーマに、近代と現代それぞれの研究から迫るという試みを行いました。半年の間、お互いの講義を聴講しながら進めたのですが、江夏教授とは、対象とする時代は異なりながらも、多くの問題意識を共有させていただいていることを知りました。今回は、「奉天地方社会有力者と清朝皇室一溥儀と撫順戦犯管理所で一緒だった「満洲国」高官たち」というタイトルでご講演いただきます。取り上げられる史実の興味深さと共に、いかに「社会」をとらえるのかという点についても、我々の研究に大いなる示唆をいただけるものと期待しているところです。

なお、今大会のシンポジウムは、1 日目、2 日目共に学会の企画によるものです。2 つのシンポジウム

のテーマは、グローバリゼーションが東アジア社会にもたらす変動を検討するという点で通底しているのではないのでしょうか。本学会としてもこうした議論を一度きちんとしておく時期であるかと思います。

最後になりますが、冒頭の「新しい、若い学会」というイメージは、「外に開かれ、常に新たな試みと問題提起を行い、若い研究者にも活躍の場が十分に与えられている」という意味では、まさにその通りではないかと思います。今回の大会でも、こうした本学会の持ち味が、十分に発揮されるよう願っています。多くの会員の皆様のお越しを、新緑の国立キャンパスでお待ちいたしております。

〈第 22 回大会開催要項〉

日時：2010年6月5日（土）・6日（日）

会場：一橋大学国立西キャンパス

本館2階

参加費：一般 2,000円

学生 1,000円

非会員 1,000円

懇親会費：5,000円（一般）

3,000円（学生）

懇親会会場（大会1日目 18時から）：

一橋大学生協

西カフェテリア

■日中社会学会第22回大会 開催校の連絡先

186-8601 国立市中2-1

一橋大学

大学院経済学研究科

南 裕子 研究室

メールアドレス：

yminami@econ.hit-u.ac.jp

電話 042(580)8810

Fax 042(580)8800

*共同研究室（語学研究室）のFaxのため、南宛であることを明記してください。

■第 22 回大会 論著資料の配布コーナー及び書籍販売コーナー設置のお知らせ

首藤明和（事務局）

大会参加者相互による論著資料の配布コーナー（受付付近）を設置します。

是非、論文、研究報告書など、お手元にある論著資料をご持参ください。論著資料は、抜刷、コピーどちらでもかまいません。設置コーナーにて配布させていただきます。

また、会員諸氏の著書などをそれぞれ持ち寄っていただき、販売する、書籍販売コーナーも設置します。情報交換や研究成果のアピールの場として、この機会を是非、ご利用ください。

■第 22 回大会 中国の大学・中国の研究機関紹介コーナーなど設置のお知らせ

首藤明和（事務局）

中国の大学・中国の研究機関の紹介コーナーを設置いたします。中国の大学・研究機関に関する資料やコピーなどを、みなさまから持ち寄っていただき、学会参加者のあいだで情報交換することを目的とします。海外を活動拠点とする「在外会員」との研究者ネットワークの構築や留学先の情報収集など、幅広い研究者・研究交流のきっかけとなることを願っております。

また、若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介などに関する資料配布コーナーも設置します。ご希望の方は大会当日、関係資料を持参の上、当コーナーにて展示、配布するなど、各自ご利用ください。

日中社会学会第22回大会プログラム

開催日：6月5日（土）・6月6日（日）

会場：一橋大学（国立 西キャンパス・本館2階）

（注）プログラムは一部変更となる可能性があります。

当日会場にて配布される資料でご確認ください。

第1日 6月5日（土）

12：00～ 受付

13：00～13：05 開会式（西本館2階21番教室）

- ・会長挨拶 中村則弘（愛媛大学）
- ・司 会 首藤明和（兵庫教育大学）

13：10～14：15 特別講演（西本館2階21番教室）

- ・江夏由樹先生（一橋大学大学院経済学研究科）
「奉天地方社会有力者と清朝皇室
——溥儀と撫順戦犯管理所で一緒だった「満洲国」高官たち」

司 会 南 裕子（一橋大学大学院経済学研究科）

14：30～16：30 シンポジウム(1)「グローバリゼーションとチャイニーズネス」
(西本館2階21番教室)

司 会 西原和久（名古屋大学）
コメンテーター 金戸幸子（藤女子大学）
賽漢卓娜（愛知学院大学・名城大学）

- ・中村 圭（同志社大学社会学部）
「グローバル化における中国の『人才』流動」
- ・池本淳一会員（早稲田大学スポーツ科学学術院）
「グローバリゼーションの中の伝統的スポーツとチャイニーズネス——武術文化
の変容を事例に」

16：40～17：40 総 会（西本館2階21番教室）

18：00～20：00 懇親会（一橋大学生協・西カフェテリア）

第2日 6月6日(日)

9:00～ 受付

9:15～10:45 一般自由報告A (西本館2階24番教室)

司会：陳立行(関西学院大学)

- ・ 聶海松(東京農工大学)
「中国農村部における高齢者生活と社会保障——2009年内モンゴルの調査から」
- ・ 呉迪(筑波大学大学院)
「中国における基層社区教育の現状と課題——武漢市硤口区のアンケート調査をもとに」
- ・ 李妍焱(駒澤大学)
「中国の草の根NGOの対政府戦略——変革と創造を目指す攻防」

9:15～10:45 一般自由報告B (西本館2階28番教室)

司会：石井健一(筑波大学)

- ・ 松谷美のり(京都大学)
「中国へ向かう若年日本人の生活戦略とポジショナリティ——香港、上海における現地採用就労者へのインタビュー調査を通じて」
- ・ シャザディグリ・シャウティ(株式会社インテージ)
「サード・エイジャーのライフスタイルとインターネット利用——中国新疆ウイグル自治区における住民調査に基づいて」
- ・ 本田親史(明治大学・法政大学)
「中国インターネット研究方法論定位に向けての予備的考察——歴史的連続性・非連続性の観点から」

10:55～12:25 一般自由報告C (西本館2階24番教室)

司会：池本淳一(早稲田大学スポーツ科学学術院)

- ・ 王鳳(島根県立大学北東アジア地域研究センター)
「改革開放以降の社会意識の変化に関する言説の一考察——「正しさ」の論理と「出来る」論理の狭間に」
- ・ 宮内紀靖(Miyauchi Institute of Social-ty・中国瀋陽師範学院)
「中国社会のシステム分析 [その老]・・・第一世代のシステム分析(人体モデル)を用いて」
- ・ 卯田宗平(東京大学・日本学術振興会特別研究員)
「村落の変化にかかわる共通性と相違性——中国・長江流域の村落を中心としながら」

10:55～12:25 一般自由報告D (西本館2階28番教室)

司会：中村則弘(愛媛大学)

- ・ 馮偉強(愛知大学大学院)
「日中間における国際出稼ぎ労働者の社会的ネットワーク——中国人研修生・技能実習生を事例として」

- ・ 巴 芳 (同志社大学大学院)

「中国人社会におけるネットワーク研究の転換—伝統ネットワークから友人ネットワークへ」

- ・ Heung-wah WONG (香港大学)・ Hoi-yan YAU (ロンドン大学)

“Kinship and Its Relevance to the Discourses on Sex and Sexual Behaviours in Taiwan: A Call for the Return of Kinship Studies”.

13 : 30~16 : 50 シンポジウム (2)「現代中国の教育と移動」(西本館 2階 2 1 番教室)

司 会 浅野慎一 (神戸大学)
コメンテーター 滝田 豪 (京都産業大学)
松木孝文 (名古屋大学)

- ・ 植村広美会員 (日本学術振興会・特別研究員)
「農民工子女の教育機会に関する制度と実態」
- ・ アルタン・バートル会員 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)
「現代中国における少数民族教育の変容と教育格差—モンゴル族の事例を中心に」
- ・ 奈倉京子会員 (京都文教大学)
「中国人帰国留学生の文化的経験」

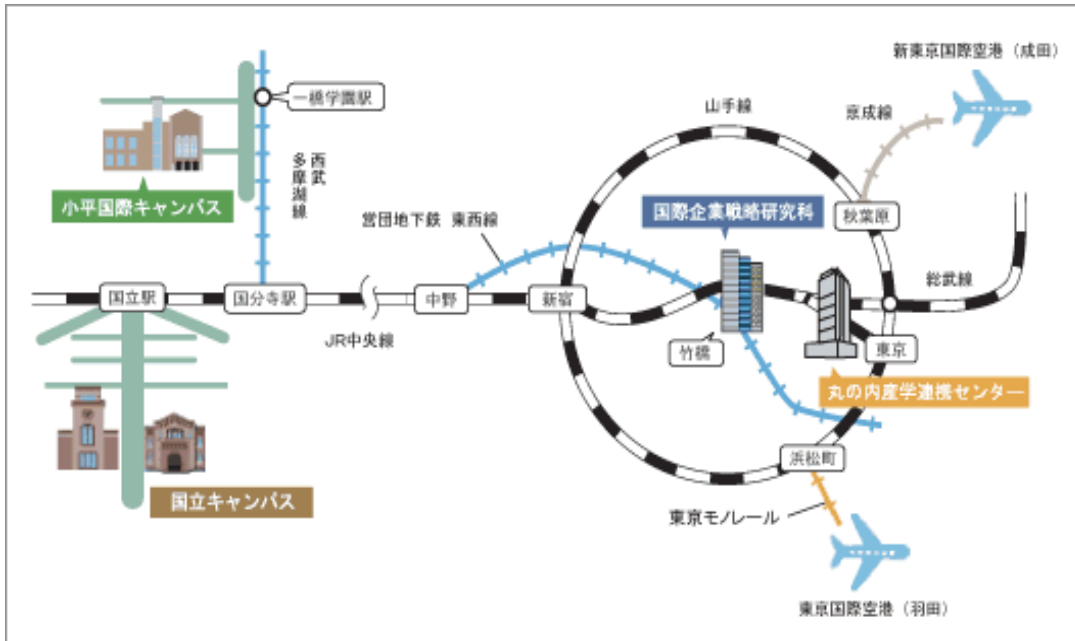
16 : 50~17 : 00 閉会のあいさつ (西本館 2階 2 1 番教室)

大会担当理事 西原和久 (名古屋大学)・浅野慎一 (神戸大学)
大会実行委員長 南 裕子 (一橋大学)

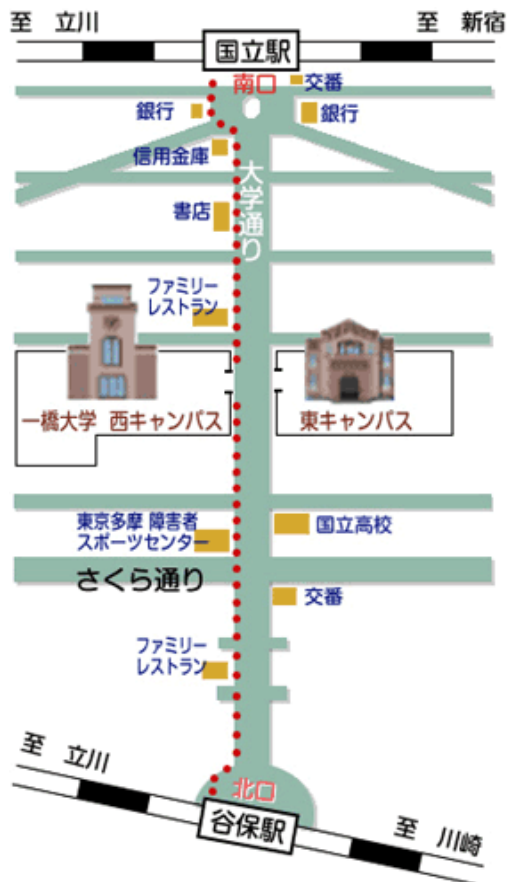
受付の近くにて

- 論著資料の配布コーナー (論文の抜刷やコピー, 調査報告書などの配布)
- 書籍販売コーナー (著者割引での販売など)
- 中国の大学・研究機関紹介コーナー (資料やコピーなどを置いておく)
- その他 (若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介など)

■会場（一橋大学・国立キャンパス）へのアクセス



国立駅から西キャンパスへの道順



JR 中央線・国立駅下車 徒歩約 6 分

*新宿から 33 分。

*中央特快乗車の場合は、国分寺駅で快速に乗換え。

JR 南武線・谷保駅下車 徒歩約 20 分

バス約 6 分

*当日は、学園祭（小平祭）と重なってしまいました。小平祭は東キャンパス、本学会は西キャンパスで開催されます。どうぞお間違えのないようお越しください。

■宿泊施設について

残念ながら国立にはありません。

付近では、立川駅、国分寺駅の周辺に宿泊施設があります。